

## 東北被災地訪問の10年～「復興」とは何であったのか？

はじめに ～ 十年過ぎ 波寄せかえす 枯れ松に

この10年は、いったい何であったのか？ 何が、どのように変わったのか？ コロナ・パンデミックによる移動制限が解除されてまもない時期なので、気を遣ったが、第14回の東北被災地訪問を大変充実した思いで終え、途中、足利市立美術館で開催されている「諸星大二郎—異界への扉」展での招待講演や上智大学10号館の私の研究室で行なったNPO法人東京自由大学主催の須田郡司氏とのトーク「東北巡礼～被災地と聖地の10年」を行ない、帰洛した。京都に戻ってきた翌日、比叡山に登拝し、いつものように天地人三才にバク転3回を捧げた（動画記録：東山修験道746 ([https://youtu.be/Bp2\\_7l-BkPE](https://youtu.be/Bp2_7l-BkPE)；2021年11月8日、10分42秒）。

10年前の2011年5月2日、巨石ハンター（その頃すでにそのように名乗っていたらうか？）須田郡司氏と私は仙台駅から東日本大震災の被災地訪問を始めた。その時の思いは、「モノ学・感覚価値研究会」のHPに掲載し、その年の11月に出版した拙著『現代神道論—霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年）に収めた。前頁にその時の冒頭の文章を載せておくのでぜひ参照していただきたい。

それから10年半。日本の社会も世界も大きく変貌した。日本では平成から令和に元号が替わった。変貌の最たるものは、気候変動とコロナ・パンデミックである。この両者は、生態学的に言えば、微妙にかつ明確につながっていると思われる。気候変動の問題は、1990年代から異常気象や気象異常として騒がれており、1993年のブラジルでの環境サミットの時点から国際的な大きな問題となっていたが、地球温暖化対策や二酸化炭素の削減や従来の石炭・石油・原子力に替わる再生可能なクリーンエネルギーの創出と整備についてはまだまだ遅れに遅れているのが実態である。

しかし、そのような人間的都合を横目に、環境問題の深刻さは日に日に深度を増し、もはや手遅れとの感も否めない。近年の自然災害（洪水・山火事・噴火・地震などなど）の大規模化と激甚化はとどまることを知らず、被害は拡大するばかりだ。しかし、手遅れであったとしても、手をこまねいていてよいわけではない。マルティン・ルターではないが、たとえ明日地球が滅ぶとも、私は1000本の樹木を植える（ルターの場合、「リンゴの木」というフレーズになっている）との気概を忘れてはいけない。「楽しい世直し」を旗印にNPO法人東京自由大学や京都伝統文化の森推進協議会などの活動を続けてきたので、この文明的構造変革は大変だとは思ふものの、諦めるという気持ちはない。アクション、アクション、アクション、だ。

だがしかし、どこまで、どのように、という見取り図なしでは、闇雲なる暴走や独りよがりな疾走に過ぎない。とはいえ、グランドデザインはできていない。未来設計についてはいかなる合意形成もないどころか、米中をはじめ、各国間の利害関係の対立や調整で混沌としているというのが実情であろう。確かに、国連やCOP26などの取り決めは一定程度進んでいるかに見えるし、SDGsの提唱も共感を呼び、実践が進んでいる面もある。に

もかわらず、事態は好転していないどころか、より深刻化している。自然災害の激甚化がその証左である。

私は2019年9月1日に、『狂天慟地』（土曜美術社出版販売）と題する詩集を「神話詩集三部作」の最終巻として出したが、その冒頭は「みなさん、天気は死にました」というショッキングな天気予報官のフレーズで始まる。

今回、通算第14回目の東北被災地訪問を終えての実感は、未来が見えない、ということである。それでも、生きていかなければならない。希望をつないでいかなければならない。いのちといのりのリレーをつづけていかなければならない。結論を先に述べれば、希望は「人」であった。環境も体制も悪化しているかにも見えるが、しかし、「人の力と深み」は増してきたところがある。私にとって、それが最大の希望であり、期待である。

今回の東北被災地訪問は、これまでの10年間の総括であると同時に、これからの10年に向かうリ・スタートの旅でもあった。気は重かったものの、いろいろと覚悟してきており、また「人の力」の凄味も感じ取ることができたので、心も体も軽かった。たましいも軽かった（カルカッタ）かも？ 体重はコロナ禍で若干増えたけど。

## 第一日 2021年11月1日 ～ 虎捕りの 弓ひきしぼる <sup>いわお</sup> 巨岩かな

10年の節目となる今回の第14回東北被災地訪問は、想定外の延期に次ぐ延期に見舞われた。たび重なる計画変更で、年内に本当に実行できるかどうか、不透明な時期も続いた。最初は、これまでの多くの訪問がそうであったように、4月末からのゴールデンウィークの時期に実施しようと考えていた。しかし、緊急事態宣言が発令されて延期を余儀なくされた。大学や公共機関は緊急事態宣言により大きな行動制限や移動制限を受けることになったからだ。公式な手続きをすれば、簡単に出張できないという事態が続いたのだ。

そこで9月に延期することになったが、しかし、9月の末まで緊急事態宣言が延期となったので、これまたやむなく延期し、次に11月1日から5日までに実施することにした。幸い、「3度目の正直」で、無事、訪問を終えることができた。

朝9時過ぎに福島駅をスタートして、一路、虎捕山に向かった。前回の訪問は2018年5月1日であったから、3年半ぶりの訪問である。この標高705メートルの虎捕山の山麓には大山祇（大山津見）神を祀る山津見神社が鎮座している。拝殿前に猫がいてじゃれてきた。宮司さんであろうか、「どうぞ、お入りください」と声をかけてくれる。須田さんと一緒に二拝二拍手一拝。「東北巡礼」の気持ちでこれから5日間の旅に出る。

参拝をすませて、虎捕山に向かう山道を登り始める。これまでいろいろと話をしてきていた加藤権禰宜さんの姿が見えないが、どうしたのだろうか、とかと考えながら山道を歩く。これまでは5月連休の頃に訪れることが多かったので、山は新緑に溢れかえていた。が、今は、11月。秋の気配が色濃く、全山紅葉である。落葉広葉樹が多いので、葉っぱが赤くなったり、黄色くなったりしていて、ハラハラと落ち葉が舞い降りてくる中を歩き、何とも言えないもののはれを感じた。途中、巨岩と出会うが、それもこれまでとは違った景色で、新鮮だった。

道々、須田さんと話をする。3年半前、須田さんは国立大学法人島根大学法文学部・人文社会科学科言語・社会文化専攻社会文化コース（文化人類学）に入学したばかりだった。しかし、それが今や、出雲地方の巨石遺跡と信仰の修士論文を提出して無事修士号を取得し、立派な文化人類学者となっている。この嬉しい変化も「人の底力」を感じる一つの事例であった。

これからは、社会人入学や生涯学習を含め、教育プログラムは多様に、かつ必要に応じて展開され、豊かな学びを深めていく時代となるだろう。NPO法人東京自由大学はその一つだ。これからも、その方向に期待したいし、尽力したい。

東北被災地の追跡調査は合計14回目となるが、須田郡司さんとの東北被災地追跡調査は12回目だ。彼とはほぼ30年以上、日本各地やアイルランドの聖地巡りを共にしてきた間柄であり、聖地参拝の同志である。この10年、定期的にこの地に訪れるという共同体験を共有してさらに同志感が深まったように思う。永年の聖地巡礼の同志よ、いつもありがとう！ 旅の道連れ、よろしく！

山頂の神域に入っていく境界を示す神さびた簡素な鳥居の前で法螺貝を奉奏。巨石が林立している。虎捕山のドルメンのような巨石。凄い迫力。空洞のところに石棺が置かれているような。墳墓の匂いもする。修験道の山のような鉄梯子を伝って、奥宮に至った。そこで須田さんと一緒に祓詞を唱え、再度法螺貝奉奏。そこからさらに奥に回り込み、巨石に攀じ登る。奥宮のさらに奥の巨石の上には、小さな石神様が祀ってあった。向かいの岩上に立って、三度目の法螺貝奉奏。森羅万象、この宇宙に届けよ。「招福除災」を招く法螺の響きよ。そのサウンドの中に祈りを込める。

虎捕山はすばらしい修験の霊山である。だが、実にパワフルな霊山にもかかわらず、まことに、まことに残念なことに、強い放射能で汚染されている。今なお、放射線量は高い。残念無念であり、極めて残酷な事態だ。飯館村の住民のみなさんにとっては憤懣も含め、大変複雑な思いがあることだろう。

放射能汚染土置き場の放射線量を横目で見ながら、飯館村から波江町の熊野山清水寺に向かう。今日は、所用があるとかで林心澄住職とはお会いできないが、お寺の再建作業は着々と進んでいるようだ。林住職は福島原発事故以来、相馬市に住んでいるが、法要などの際に、以前は許可を得て、お寺に戻っていたが、昨年浪江町の帰宅困難地域の解除以降、再建を始めた。

これまで500軒ほどあった檀家の内、解除後、戻ってきたのはどれくらいなのか？ 3年半前には戻ってきた家はたった1軒のみだった。その後、どれだけ檀家が戻って来たか。行政や集落の維持運営など、さまざまな困難や矛盾を抱えながら、これから浪江町で、以前のようにお寺を地域の拠り所にしていくことができるだろうか。そのようなことをあれこれ考えながら、南相馬市の小高神社を参拝を経て、福島県双葉郡浪江町の熊野山蓮華院清水寺に到着すると、お寺は見違えるほど美しく再建されていた。思っていた以上に、お寺の規模も大きく、整理されていた。今は池を造っているのか、作業員が工事をしていた。お寺の本堂前に進み出て、須田さんと一緒に般若心経を唱え、法螺貝奉奏。

その後、浪江町の海岸線に出て、くさの神社跡を参拝。この海辺のすぐ近くにはもう人は住めない。神社は廃墟のようになっている。もう一つ、海岸沿いの綿津見神社を参拝する。南方系の神社の森の匂いがする。たぶん、その気配と匂いは樹種が生み出す環境的雰囲気であろう。

南相馬市鹿島地区の鹿島御子神社に向かう。30メートルほどもありそうな神木として崇められる櫟の巨木がすくと立っていて。黄色い葉っぱが風にそよいでいた。季節は秋、11月、すでに暗くなってきて、夜7時には東北大学の二人の教授と会う約束をしている。大変残念かつ申し訳なかったが、相馬市の中村神社をパスして、福島県を出て、真っ暗な中、急ぎ宮城県名取市閑上地区日和山に向かう。到着すると、時刻は18時過ぎになっていた。閑上日和山・富主姫神社と湊神社と供養塔を拝礼。漆黒の闇の中で、般若心経を読経し、法螺貝奉奏。暗くて仄かな町と人家の明かりしか見えないが、思いは真っすぐに届けた。犠牲になった方々の無念と夢と希望を無駄にはすまい。絶望のハンマーに打ちひしがれている暇はないのだ。

閑上から急ぎ、仙台へ。約30分後、R&Bホテル仙台広瀬通駅前東北大学大学院文学研究科の二人の教授、谷山洋三さんと高橋原さんと落ち合った。ホテルのすぐ近くの牛タン屋利休で、仙台名物の牛タン定食を食べながら、2時間近くさまざまな話題を語り合った。この10年で一番大きく変わったことは？ という問いかけから始まり、2016年2月設立の「日本臨床宗教師会」の活動のことに話は及んだ。谷山洋三さんはその事務局長であり、高橋原さんも事務局を支えている。この二人の活躍なしに、この会の運営はない。

2011年5月2日、須田さんと私は、仙台の宮城県庁で行われた「心の相談室」発足の記者会見に立ち会った。そこにはまだ谷山さんも高橋さんもいなかった。この後、緩和ケアの先駆者の岡部健医師の提唱により、2012年に東北大学に実践宗教学寄附講座が生まれ、「臨床宗教師」の養成講座が始まった。東北大学の宗教学者の鈴木岩弓教授が中心となり、そこに谷山さんと高橋さんが加わったのだ。この時は一年任期の任期付き准教授としての採用であった。

しかし、それから10年経った。すでに岡部健医師は故人となり、鈴木岩弓さんは定年退職して東北大学総長付き特別教授となり、日本スピリチュアルケア学会などで要職を務めているが、その後を埋めて大活躍しているのが、この二人、つまり、谷山洋三さんと高橋原さんだ。谷山さんは、この間、『仏教とスピリチュアルケア』（東方出版、2008年）、『医療者と宗教者のためのスピリチュアルケア——臨床宗教師の視点から』（中外医学社、2016年）、『人は人を救えないが、「癒やす」ことはできる』（河出書房新社、2018年）などの著書を精力的に出版している。高橋原さんは、つい最近、7月に「葬祭仏教と社会参加仏教」（『近代日本宗教史第6巻 模索する現代—昭和後期～平成期』島藺進・末木文美士・大谷栄一・西村明編、春秋社年）の論考を、また9月には、盟友堀江宗正東京大学教授と共著で『死者の力——津波被災地「靈的体験」の死生学』（岩波書店）を出したばかりだ。

二人とも、今では、東北大学文学研究科の教授として無くてはならない存在となっている

る。私にとって、この二人の活躍がこの10年での具体的な大きな変化である。それはまた一つの希望であり、期待である。須田さんも出雲でがんばっているが、谷山さんや原さんも仙台でがんばっている。吾も京都でふんばらにゃ～の～！

11月1日の夜、2時間びっちりあれこれと語り合う中で、最後は、須田郡司氏の『鬼滅の刃』論のあつい、あつい、大熱弁で終わった。それを呆けたように傾聴する我々三人は、『鬼滅の刃』論の魔力と霊力にしてやられたのだった。嗚呼！ あれは、何だったのか？ 10年の大変化は『鬼滅の刃』に現われている???

## ★東北被災地訪問第一日目記録動画（2021年11月1日、28分）

: <https://youtu.be/yvfJvu1iRYg>

## 第二日 2021年11月2日 ～ 浪分けの 響きよとどけ 常世まで

朝8時30分、宿所のホテルR&Bを出発し、まずは本日最初の訪問地である浪分神社に向かう。ここが我らの原点である。「浪分神社」は、津波メモリアル、災害警告としての神社の機能を持っていた。まずは、そのことを確認せねばならない。その昔、このあたりまで津波が押し寄せて来た。だから、それ以後、「これからは、いつも警戒を怠るでないぞよ」という教訓を示す境界線となった。須田さんと一緒に祓詞奉唱し、法螺貝奉奏する。

神社の隣に建っている公会堂で会合の支度をしている男性がいたので、声をかけて話を聴く。この10年でこの地域は大きく変わった。それは東武自動車道より東に、ということとは、海岸線寄りに住む荒浜地区の人たちがかなりの数引っ越してきて、ここに一つのタウンができたことであった。地域の構成が変わったということである。それによって生まれるメリットとデメリットがあるということだろう。震災復興に関わる行政の補助金などの配分を含め、さまざまな議論や対立や駆け引きが生まれる。それは、人間社会の常相であるが、しかし、それによってしわ寄せを食ったり、ダメージを受ける人もいる。利益を被る人もいる。まちまちであるが、難しい。単純ではない。しかし、政策は一つの施策として実行されるので、実施されたら、それ以外の選択肢はないことになる。議論は分かれても施策は一つ。これが悲劇を生むこともある。利益を生むこともある。

浪分神社を後にして荒浜海岸に向かう。仙台市若林区荒浜はもっとも被害の大きかった地区である。新しく出来たタウンを見て回り、東武自動車道を潜って、野球練習場のあるところで、いつものように、般若心経と法螺貝を奉奏する。

何をやってんの？ この人たち。誰もその意味をよく理解できないだろう。この変な二人組は、この農地のところで何をしとるんか？ しかし、どのような場所も、その人にとって、ある人にとって、当事者にとっては、特別の記念地になるのだ。思いの籠ったスペシャルなところとなるのだ。森羅万象がスペシャルメモリアルになる。成り得るのだ。そのことを、いつも、この地で確認する。My聖地、須田さんと二人だけのOur聖地。最初にここに立った時の「初心」を忘れちゃいかんぞ。思い上がるな。しかし、思いを下げるな。お前はお前の道を往け！ と突き出される。はい。と、どうしようもなく、一步を踏

み出す。そのような、受け入れたくない現実、見続けていられない現実を、受け入れるための、見続けるための一步を確認する場所。忘れてはならない、そのポイント・オブ・ビュー。

荒浜小学校の前を通り過ぎる。震災遺構、津波メモリアルとして残している。災害記憶を風化させてはならないという荒浜の意思。そして、荒浜海岸に立った観音像と供養塔を拝礼。般若心経一卷読誦。石笛・横笛・法螺貝のわが三種の神器を奉奏する。この観音像の右脇に八大竜王の鳥居がある。かつてはここに小祠があった。だが、その祠はもうない。ただ、鳥居の残滓のみがぽつんと立っている。そこから防潮堤が見える。防潮堤工事は終わっているが、ここは海岸に近く、危険地帯なので、一軒も民家は新築されていない。そして、震災記憶を記録する場所となっている。

荒浜から七ヶ浜に向かう。10年前の2011年5月2日に最初に野宿をしたところだ。それが七ヶ浜公園の駐車場だった。その七ヶ浜には、岬の突端の花淵灯台の近くに延喜式内社の鼻節神社が鎮座する。神さびた奥床しい神社で心洗われる。20年以上前、伊勢の猿田彦神社の宇治土公貞明宮司たちと一緒に来たのが最初だった。しかし、その宇治土公貞明宮司もあの世の人となった。法螺貝奉奏して海岸線に出る。11月の朝なのに、暑い。気温は11月とは思えぬほど。20度近くまで上昇している。沖の三ツ岩を見ていると、1994年8月に須田さんと一緒に行ったアイルランドのスケリグ島を思い出す。島に渡る前に二人で海で禊をした。その後、ポートマギーの海岸に虹が立っているのを見た。吾らの門出を祝福してくれるかのような虹だったが、スケリグ島に着いた時、須田さんは船酔いで半死に状態になっていた。

鹽竈神社に急いだ。石巻で雄勝法印神楽保存会の前会長の伊藤博夫さんと会う約束となっているので、鹽竈神社の野口次郎権宮司さんと面談することは諦めた。この前の権宮司さんの話では、このところ参拝者は増えているとのことだったが、コロナ・パンデミックのさ中では参拝者も減少したであろう。東北の神社や寺院の現状は厳しい。辺境地域の神社の存続は厳しく、氏子がいなくなった神社もある。そうなると、不活動法人とされ、500社近い神社を兼務することになった神職さんもいるという。500社！ 800万の神々、「八百万の神々」の数まではいかぬが、目が回りそうだ。

野口次郎権宮司さんと初めてお会いしたのは、2011年5月2日、仙台の宮城県県庁においてであった。当時、鹽竈神社の筆頭禰宜だった野口さんは、岡部健医師や鈴木岩弓東北大学教授たちと一緒に協力して「心の相談室」を開設する記者会見を行なったのだった。須田さんと私はその記者会見の場に立ち会い、その翌日に野口さんを訪ねたのだった。

仙台では、このとき、異なった宗教や宗派の宗教者が協力し合って合同葬儀を執り行った。それが「臨床宗教師」の活動の原点ともなった。記者会見の場には、上に記した方々以外に、宮城県宗教学会連絡協議会の会長の天理教多賀城教会長の齋藤軍記氏。天台宗北目山聖賢院の四龍亮澄住職。司会進行役を務めていた仙台キリスト教連合事務局・日本基督教団仙台市民教会牧師の神学博士川上直哉氏らの面々がいた。この方々が医療関係者らとともに超宗教・超宗派で活動し、弔いからグリーフケアまでの総合的ケアを行なおうとするこの宗教者間の協力を進めていったのだった。そして、「日本臨床宗教師会」が2016年2月に発足した。その事務局長を、昨夜会談した谷山洋三さんが務め、高橋原さんがその補佐をしている。

あれから、10年なのだ。この10年で、何が、どう変わったのか？ よき変化が起こっているのか？ そうではないのか？ もちろん、すべてがよくなったとか、すべてが悪くなったとかとはありえないだろう。しかし、ほんとうによくなった、と思えるところがあまりにも少ないように思うのだ。そして、矛盾や深刻さがやたら目についてしまうのである。もちろん、谷山さんや高橋さんががんばっていることや、野口さんが筆頭権禰宜から権宮司に昇格したことなどは嬉しい出来事ではあるが。

志波彦神社で法螺貝奉奏した後、高速道に入って、石巻に向かい、伊藤博夫さんとコンビニの前で待ち合わせた。伊藤さんとそのコンビニ近くの店で昼食を共にしながら、話を聴く予定だったが、店が休みになっている。いつもは水曜日が定休日なので、火曜日である今日が休みなのはおかしいと、伊藤さんは首をひねっている。仕方がないので、少し離れた別の店に入り、中華料理を食べながら話を伺った。この10年での大きな変化を。

伊藤さんにとっては、当時の会長さんが津波で行方不明となり、副会長であった自分が会長となり、みんなを引っ張って、何とか雄勝法印神楽を復活させることができた。そして、この地区だけではなく、鎌倉市の鎌倉宮や澁谷のNHKホールなどにも出演して、雄勝法印神楽を見てもらった。自分たちも活力を蘇らせたが、それを鑑賞した人たちにも多大なインパクトと感動と活力を与えた。そのことを目の当たりにしているので、雄勝法印神楽の復活と子供たちへの継承を心から嬉しく思っているが、しかし、雄勝町の人口減と町の活力の戻りについては、なかなか難しい、課題山積という。そして、問題の防潮堤。12メートルもの防潮堤が、あの美しい雄勝町の中心部を覆うことになった。これは本当に必要なのか？ と思う。建造中のこの前も思ったが、今回はいよいよどうしようもなく重い気持ちで疑問を抱かざるを得なかった。どういうことなのだ、これは。ベルリンの壁のような防潮堤。ベルリンの壁はしかし、わずか3~4メートルだ。その3~4倍もの高さがある防潮堤を造った。万里の長城のような。これをはたして、本当に「復興」と言うことができるのか？ ムリだろ、それは！ と思わざるを得なかった。

もう一つの問題は、後継者問題だ。町の青年が嫁さんをもらうのもなかなか大変なのだという。結婚できなければ、当然、子供も生まれぬから、後継者が減る一方となる。そして、いよいよ後継者がいなくなったら、町も滅ぶしかない。今はまだよい。だが、問題はその後だ。次の世代にどのようになるか。それが一番の問題だ。伊藤さんはそのように語った。

伊藤さんとの面談を終え、名残惜しいが、別れを告げて、急ぎ女川町に向かった。この女川町の変化は著しい。東北被災地の中で最も大きな変貌を遂げた町であり漁港だ。

いつも行っていた女川町立病院のある高台は無くなっていった。まったく町の様相が変わっている。この高台から被災地と海に向かって鎮魂の意を込めて法螺貝を奉奏していた。その後、いつも、高台の喫茶店に入ってコーヒーを飲んだ。この前など、店のお客さんが法螺貝に目を止めて、「法螺貝ですか？」と聞いてくるので、「吹きましようか」と店の中で法螺貝を吹いたら、突然、「うるさーい！」と子どもの声がした。見ると、漫画を読んでいた店の小学生の女の子が騒音にたまらず、声を上げたのだった。いいねえ～、子どもは正直で。それでいいんだよ。君の「うるさーい」を吾は受け止めるよ。

今回は、高台の最上層に鎮座する熊野神社で法螺貝を奉奏した。この神社の宮司を雄勝町の石神社や葉山神社の宮司の千葉秀司さんが兼務している。今日は、その千葉宮司と面

談できるだろうか？ 後で電話して確認せねば。

以前の記憶がなくなるほどに変わってしまった女川の町を出て、雄勝町に向かった。12メートルの防潮堤を見て、憤り、憤慨し、嘆きながら、葉山神社に到着した。参拝してから、奥宮の延喜式内社の神社まで山道を40分ほど登る。848メートルの比叡山を746回も登って、山登りは慣れているはずなのに、結構きついのだ、これが。

これまでは早朝に上ることがほとんどだった。が、今回はスケジュールが変更となって夕方上り始めた。5時前にはほぼ真っ暗になるので、17時までには下山しないと危険である。なので、急がねば。休みなしに石神社まで一気に登る。そこには、社殿はない。拝殿もない。もちろん、本殿もない。ただ、あるのは小さな鳥居と巨大な磐座だけ。7メートルほどもあるだろうか、二段構えの巨石が聳え立っている。大きな鏡石のような、平たく、少し菱形に近い形の、表面が平らで、よく見ると龍の形に浮き彫りになっているような。磐座の前で、法螺貝を奉奏。石と貝との交歓。終わって、奥に回り込み、後ろから拝す。そして、山頂の尾根道を辿って、神籬の前に出る。その神籬は、丸い巨石に巨大な樺の木が跨るように生えている。木と岩が合体し、合一しているような、陰陽和合の姿のような、実にエロティックであるが、またそれが直截な生命力の発露でもあり、いやらしくなく、すがすがしくも、堂々たるいぶきに満ちた合体像なのである。このような美しい毅然とした交合ができたなら、さぞかし世界は調和と生命力に溢れ返るであろう。これ以上、付け加える何もない。それでよい。それだけでよい。それ以上は望まぬ。極の景色だ、これは。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。三拝しても足りぬほどに神々しくも有難い。その姿を拝して、いのちといぶきに包まれた。この時、折しも、日没が見えた。今日の最後の光を西の空から放つ。それがこの石峰山山頂の森に届き、神籬の樹木を照らしている。何という、タイミング。何という、荘重、荘厳。言うべき言葉はなく、ただただ合唱再拝。

だが、帰りは暗闇の中。足元が悪く、捻挫しそうだったが、何とか持ちこたえた。山から里宮の葉山神社まで降りてきた時、ちょうど、絶妙のタイミングで、葉山神社と石神社の宮司である千葉秀司さんから電話が入った。出ると、第一声に、「先生、受かったんですよ。息子が、國學院大學に。」

弾んだ声で千葉宮司が言った。子息が國學院大學の神道文化学部の試験に合格して、神職になる資格を得ることができる。四年の時がかかるが、しかし、道が開けた。後継者ができる。千葉宮司のその嬉しそうな声。それを聴いているだけで、未来が明るいと思えるような明朗さだった。さぞかし心配だったのだろう。石巻市内にある高校にその息子を車で迎えに行っているという。千葉宮司の明るい声に励まされる思いを持ちながら、しかし、宿泊先の宿に向かう途中、東西ベルリンを分断する壁ではない、海と陸とを、そして自然と人間とを分断する12メートルもの防潮堤を見上げながら、暗く沈む心を持って余っていた。

★東北被災地訪問第二日目（2021年11月2日、41分）

： <https://youtu.be/gcfIVT8EtIY>

### 第三日 2021年11月3日 ～ 北上の なみだの川の その向こう

朝8時半に宿を出て、石巻市釜谷地区の大川小学校に向かう。今日も快晴。これまで3日間ともに日本晴。とてもよい天気、最高気温は20度を上回っているほどだ。あつたかくなりそう。というか、暑いくらいだ。

だが、大川小学校に着くと、心は次第に冷えていく。なんで、こうなってしまったのか？ 児童74名も教職員10名も全部犠牲になるのを免れたはずなのに。という思いがふつふつと沸き立ってくる。無念であるが、怒りと理不尽さが混じっている。それは、何に対する怒りなのか？ もちろん、現場の指導をしていた責任者に対する怒りは大きい。だが、それだけではない。このような惨劇的事態を招いた日本の教育体制というのか、教育プログラムというのか、臨機応変に先生たちを動かさなくしている「管理体制」ってやつに腹が立つのだ。吾などはその管理体制からはずれに外れた鼻つまみ者だったが、今でも「こんな管理体制、糞食らえっ！」という怒りと抵抗がある。バカにするな、おれたちを。いきものの素朴で神聖ないぶきといのちを奪うな、と叫びたくなる。そんな混沌とした感情が噴出してきて抑えることができない。

供養碑のところで、須田さんと般若心経一巻の奏上。そして法螺貝奉奏。その後、新しく出来た「大川震災伝承館」に入って、震災記録を確認する。震災時の具体的な記録が展示されていて、なまなましくもあつたが、改めて事実関係の全体像を知って、考えさせられた。なぜ、この惨劇を防げなかったのか、と。もちろん、このような問いは後の祭りではあるのだが、しかし、震災記録が示している教訓を引き出し、それを生きる方途に変えていくことは残された我々の責務であると思う。

今回、大川小学校が震災遺構となったことにより、より注意深く施設や周りの環境を見て回った。すると、実にうまく学校建築ができていることが理解できた。というのは、3年生から6年生までの中高学年生はブーメラン上に少し湾曲した公舎に教室を構えていたが、そのどの教室からも八角形だったかの1～2年生の教室が見えていたことを知り、中高学年生が幼い1～2年生を見守っているような建築空間になっていることがわかったからだ。まさに胎蔵界的建築であり、子供たちへの教育的配慮が行き届いている空間設計であると思った。建築設計はすばらしい！ しかし、教育プログラムの一つである防災訓練や防災対策には抜けがあった。ハード面の充実とソフト面の希薄。これは戦後日本のいたるところで見られる矛盾とアンバランスだ。ハードが貧弱でも、ソフトを豊かにすることでカバーすることができるが多々ある。私たちが掲げてきた「楽しい世直し」とは、そのようなマンパワーを元にしたソフト面の開発であり、NPO法人東京自由大学の活動もまさにソフト充実の世直し運動であった。

だが、日本の学校教育は、総じて、そのような方向に向いていない。確かに、掛け声は内容充実に目を向けているかに見える。だが、その中身は空洞、空虚だ。それが偽らざる我が実感であり、痛感であり、痛切な反省である。

大川小学校を辞して、釜谷の海に出た。10年目にして初めて、北上川南岸の河口に立った。憤怒の感情を抑えきれないまま、やるせなく、海に向かって法螺声を放った。ウォーン、と吠えた。

そして、北上川対岸、北岸に位置する釣石神社に向かった。前の晩に、岸浪均宮司さんとは電話で話をし、近況を確認している。釣石神社も徐々に復活してきたが、しかし、この2年近く、コロナで参拝者も減ったことであろう。しかし、その中でも、地道にがんばっている。その宮司さんの真摯な姿は訪れる私たちに大きな勇気を与えてくれる。復興の支援をしたいと思いながら関わってきた私たちが、逆に励まされ、そして支援されているのである。役割が逆転しているが、しかし、それが現場と人の力の醍醐味のようにも思う。

釣石神社を出て、歌津や南三陸町を経て、気仙沼市に入る。大谷海岸も随分整備された。階上町の交差点を右折して地福寺（臨済宗妙心寺派）の前を通って岩井崎に出る。その岬の付け根のところにある琴平神社に参拝。この地は海拔14メートルほどの海辺にある神社なのだが、その近くの家屋や施設はすべて津波に呑み込まれたのだが、不思議なことにこの神社は被害に会わずに残った。絶妙の地形と津波当日の力動が作用してこのような事態となったのだろう。奇跡的に残されたこの神社が発信しているメッセージは何か？考えさせられる。それは、海や山など、自然の持つ威力を恐れ、崇め、畏怖畏敬しつつ、自分たちの位置を常に謙虚に自覚して生きることを忘れない、というありようにつながっていく。自然のはたらきの大いさに感嘆しつつも、しかし、人間としてできること、できないこと、しなければならないこと、してはならないことを、それぞれに切り分けしつつ、打ち出していくほかない。時には過つこともあるだろう。理に適わぬこともあるだろう。しかし、たとえ手痛い失敗があったとして、その失敗が訴えているメッセージを聴き取る心と力が必要だ。耳無くしてその声は聞こえず、心無くしてそのメッセージは届かない。

岩井崎の防潮堤に立って、気仙沼湾を見る。新たに大橋ができています。また、大島に渡る橋もできた。今日はそこを通って大島に渡る予定だ。

潮吹き岩のところで太平洋から打ち寄せる波の音に耳を傾ける。龍の松も健在だ。が、この海岸線を覆う分断の防潮堤はやるせない。地福寺に向かう。新たに就任された新住職と話をすると、片山秀光前住職がお寺に来ていると伝えてくれた。声をかけて本堂に入ったが、誰もいない。般若心経一卷と石笛・横笛・法螺貝奉奏。終えて、もう一度声をかけたが、どなたもいないようだ。玄関を出て、山門を潜った先で駐車場を掃除している女性がいたので、京都から来たものですが、ありがとうございますとお礼の声をかけると、何やら急いで住職さんがいるのでと取り次いでくれた。どうやら、奥の間にいらしたようだ。久しぶりに前住職の警咳に接して感慨無量であった。当年81歳になるが、昨年、白石から縁により新住職を迎えたという。これは地福寺にとって、大きな変化である。片山前住職が懸命に支援していた宮脇昭横浜国立大学教授の「緑の防潮堤」構想はこの階上町では実現しなかった。私もその方法を取るべきだ思ったが、国交省も宮城県も採用したのは十数メートルのコンクリートの防潮堤である。本当にこれでいいのか。この国立公園をこのような防潮堤で覆うことがはたしていのちと暮らしを守り、地元の文化と生活を豊かに維持していくことにつながる事なのか。疑問である。海を見ながら、海と親しみながら、そして海の恐さを十分に弁えながら生きるもっと違った道があるはずだ。そう思わざるを得なかったが、当事者でない私は防潮堤反対の声明を比較文明学会や地球システム・倫理学会に提案して出してもらったが、効果はなかった。国の助成金が地元を下りるため

には、国の考えとやり方を受け入れるしかないのか。国がおかしいということ、正々堂々と正面から言い、国の方針を変え、政策転換するにはどのようなやり方が必要なのか。

片山秀光前住職は無念な思いをにじませながら、NHKのテレビ小説の「おかえりモネ」の中で浅野忠信が演じた漁師の父親が妻を亡くして死亡診断書に判を押す場面を見てグッとくるものがあったと涙をにじませて語ってくれた。遺体が上がらなくても、行方不明のままであっても、お別れし、区切りを付けなければならない。妻の死を受け入れられない。アルコール依存になっても、妻の思い出とその「死」に縛られ、過去と現在との断裂に引き裂かれる。その微妙で複雑な思い、それを複雑性悲嘆とも言ったりするが、もろもろ見届けてきた片山前住職さんにはさまざまな出来事が重なり、万感迫るものがあったのであろう。一挙に痛い記憶の数々がいろいろと思い起こされたのだろう。その意味で、朝ドラ「おかえりモネ」の「おかえり」効果は絶大なものがあったと言えるだろう。特に、気仙沼の地元の方々にとっては。涙なしには見られない時間とシーンがいくたびあったとか。そのことを片山前住職との対話で目の当たりにして言葉を失なった。

地福寺から気仙沼大島に通じる橋を渡って龍舞崎に行き、向かいにある岩井崎を望む。1時間前はあの岩井崎からこちらを見ていた。そして今は、対岸の龍舞崎から岩井崎を望む。この距離の間を大津波が気仙沼港に押し寄せ、夜中に港が燃え上がったのだった。10年前の3月11日の夜、熊野本宮の旅館でクマのシンポジウムのために沖縄からやって来た大重潤一郎監督やその友人たちと交流した後、部屋に戻ってテレビをつけると、気仙沼が映っていた。気仙沼港が炎上している場面だった。それを見て、私は一瞬、宮崎駿監督のアニメーション映画『風の谷のナウシカ』の最後の方で真っ赤になった王蟲が暴走していく場面と見違えてしまったのだった。ここに、王蟲の暴動が起こっている、気仙沼港の炎上はそれと二重写しになった。

あの光景から10年。気仙沼はどのように「復興」したか？ そして、気仙沼大島は？ 乙姫窟に入って法螺貝奉奏。この乙姫窟の洞窟内の海に入って何度須田さんと一緒に禊したとか。波に攫われて窟外に引きずり出されそうになるのを踏みとどまるのが大変だった。次から次へと波が押し寄せて来て、窟内に入ってくるから。しかし、今日は暗黙の裡に禊をしない雰囲気になっている。それはこの後の大島神社や金光教気仙沼教会訪問でのインタビューにかなりな時間がかかるかもしれないという思いがあるからだ。

大島神社を参拝して、小松勝麿宮司さんから話を聞いた。この10年、祭りを絶やしたことはない。祭りを中止はしない。そう地元の人に宣言して、そこは崩さなかった。「祭りは行うよ。でも、その祭りのやり方については、意見を聞いて検討し、合意を撮るようにしましょう。」小松宮司は島人にそう語りかけたという。「大事なことはブレないことですよ。祭りを中止するという選択肢はない。それは私の思考の中に一切なかった。」小松宮司はそうも断言した。この宮司にしてこの島の人々の生活がある。その意味で、島と神社は一体化している。

小松宮司は、「橋が出来て何が変わりましたか？」という私の質問に対して、「これでやっと日本人になれましたよ。」と明確に語った。それはどういう意味か？ これまでは

島を出る時、必ず、帰りのフェリーの時間を決めてから出かける。言わば、未来からのバックカスティングの思考である。そして、格安飛行機などに乗る時など、朝早くて夜遅い便になるから、前泊と後泊が必要になる。つまり、一般の日本人よりも、2泊余計に日数と費用が掛かるというのが島の生活だった。それが、本土の時間と一緒にになった。これが一番大きいね。

「おかえりモネ」の冒頭シーンは、1995年9月、産気づいたモネ（百音）の母の鈴木京子演じる永浦亜哉子が陣痛になって島から船を出してもらおうのだが、台風12号に見舞われて定期フェリーは欠航しているし、臨時に船を出すことができない。それほど荒れていた。そこを命知らずの漁師の浅野忠信演じるところの朝次が船を出してくれたのだった。

大島から気仙沼の港に戻り、そこから南町の坂を少し上ったところに鎮座する紫神社を参拝し、金光教気仙沼教会を訪ねた。東日本大震災時、この紫神社と金光教気仙沼教会は地域の被災者の方々の避難所となった。

周りは真っ暗だったが17時少し前に到着し、教会の夕拝の時間に間に合った。奥原志郎教会長さんの祝詞や祈願詞や祭文の朗唱は素晴らしい！ 実に渋い大地の底から響き渡るようなしっかりとした太い声で、朗々と祈りの言葉が唱えられていく。その言霊、言霊、声霊の力に陶然となる。共にその朗唱に合わせて声を乗せていく。遠い海の彼方に旅していくような心持がする。この声を聴くだけでさぞかし多くの方が安心したことだろう。そこで唱えられている意味がよくわからなくても、その大地から天に通じていくような声を聴いているだけで安心した人がいたはずだ。赤ちゃんが母親の子守唄を聴いて安心して眠ることができるのとも似ている。人はどのような時でも安心を求める。本能的に安心したいと思っている。それが生きていくためには必要だ。人間生活は常に不安に見舞われる。だが、その不安の渦中にあっても少しでも安心できる時間と空間を作るのが人間の希求であり創造行為である。

奥原志郎教会長は第一声で、この東日本大震災で問われたのはまず何よりも自分のありようであったと語った。「私自身が問われた。」と。金光教の教会長として、宗教家として、金光教の信仰や思想や教義に基づいて生きてきたが、そのありようが根本のところから問われた。そして、ボランティアの方々から学ぶところ、受け取るものが本当に大きかったと感慨深く述べられた。

もう一つの大きな問題は防潮堤だ。最近、地元の人を含め、いろんな人から、「防潮堤が造られて、それがほんとうに『復興』と言えるのですか？ と問われることが増えてきました」。漁師の人たちは毎日海を見ながら、自分の経験を通して海と付き合ってきた。それがこの防潮堤で遮られた。しかも、今後、この防潮堤の高さを超える津波が来ないとは限らない。むしろ、今の地球全体の気候変動を考えると、東日本大震災時の津波を超える津波がやってくる確率が高いと言わねばならない。その時、この防潮堤によって、二次被害、三次被害を含めて、返って被害を大きくするのではないかと心配である。

国は、時限を切って、いついつまでも工事計画を決めて実行しないと助成金を出さないという脅しを仕掛けて来る。地元の人にアンケートをしたりして、じっくりと議論をする暇もない。唐桑半島などでは、30年以上「森は海の恋人」という植樹運動を展開している畠山重篤さんたちの「生態系減災」（Eco-DRR）の考え方に基づく反対が強くあり、

防潮堤はできなかった。この「生態系減災」の考え方は、宮脇昭さんの提唱する土地本来の自然植生を活かした「混植・密植型植樹」による「緑の防潮堤」も基本的に同様である。自然の力を借りて災害リスクを減らす「生態系減災」の考え方は、これからの災害対策の基本になるだろう。

話の最後は、「おかえりモネ」のことだった。奥原幹雄副教会長は、主人公モネの気持ちがよくわかるという。実は、震災前に東京での仕事に区切りを付けて、3月の初めには会社を辞めて気仙沼に帰ると決めていた。だが、会社の都合で3月末まで勤務が延びることになった。そのために、震災後に東京から気仙沼まで帰ることになり、最初の帰宅は物資を運ぶ帰還であり、活動だったが、しかし、震災の時には、そこにいなかった。それは、島にいなかったモネと同じだ。だから、モネの自分を責める気持ち、その罪責感がよくわかる。自分も同じだったから。帰ってきて、避難しているみなさんは、「よく帰って来たね。」と優しく迎えてくれた。しかし、自分は肉親を亡くしたり、家を失なったりした人にどう接していいかわからなかった。みんなの痛みや悲しみを想像すると、どうしてよいかわからず、ボランティアのみなさんと一緒になって、できることは精一杯やっていたけど、それでいいのかどうか、迷いはあった。その後、東北大学で開催された実践宗教学寄附講座の臨床宗教師養成講座の4期生として受講し、修了し、今は「認定臨床宗教師」としての資格を持つ身となったが、あの時のことを思うと、複雑で、モネの気持ちがよくわかるんです。そのような話をポロっと漏らした。

それを聴いていた幹雄さんの母である教会長夫人は、「そんなこと、初めて知ったわ。あなたが3月の初めに戻って来ず、震災の後戻ってきたことに私は会社に感謝したのよ。ここにいたら、本当にどんなことになったか、わからなかったから。」と言われた。そうだろう。そうだろう。母の気持ちとしてはそうだろうと納得できた。

しかし、同じ震災地に住んでいても、被害の度合い、被災の状態、当事者性の違いは大きく多様なのだということを改めて思い知った。被害を受けた人の苦しみもあれば、それほど被害を受けなかった人の苦しみもある。震災はさまざまな苦の文様を描き出したのだ。

奥原志郎教会長、そして、教会長夫人、奥原幹雄副教会長との語らいは2時間近くに及んだ。夜が更けてゆくまで、このようにこれまで何度もインタビューともつかぬ対話や交流に付き合っただけに心からの感謝の意を表しつつ、教会を辞し、気仙沼駅前のビジネスホテルに入って、この日の記録をまとめたのだった。

#### ★東北被災地訪問第三日目記録動画前篇

(2021年11月3日、22分) : <https://youtu.be/58FYr6Xa8g0>

#### ★東北被災地訪問第三日目記録動画後篇

(2021年11月3日、1時間35分) : <https://youtu.be/yd3wwcBho0s>

## 第四日 2021年11月4日 ～ 白岩の 浄土ヶ浜の ほとけ道

朝8時半出発。まず、気仙沼港の防潮堤を見る。車道は嵩上げをしているため、防潮堤がそれほど高くは見えない。湾の一番奥に当たる道路沿いの防潮堤付近を歩いてから、気仙沼の巖島とも言える五十鈴神社を参拝した。祓詞奏上、法螺貝奉奏。ここから見る気仙沼の光景は格別美しい。私はこの気仙沼の景観に強く魅かれるものがある。何か、ノスタルジックな気持ちを掻き立てられ、切なくもあるが、嬉しいような何とも言えぬ親しみを感じるのである。この美しい港町がどのように変貌したのか、恐る恐る五十鈴神社の方から防潮堤を見てみると、やはり防壁の塊のような圧迫感があった。確かに、石巻市雄勝町のような万里の長城のような巨大な威圧感はない。けれども、その前の親水的な、日本のヴェニスのような海との近さに魅せられていただけに落胆も大きかった。港湾美は台無しになった。防潮堤の建造によって。

思いを残しつつ、陸前高田の市街地に入る少し手前の集落の高台にある月山神社に立ち寄る。法螺貝を奉奏したら、荒木道明宮司さんが出て来て、近況を話してくれた。陸前高田の町も、市街地にかなりな分量盛り土をし、その上に公共建築などを建てた分はほぼ復興したようだが、しかし、前のように民家は戻って来ず、飛び飛びの空き地がある歯抜け状態になっているらしい。数年前までは山から市街地までベルトコンベアーを通して、物凄い量の土を運び入れていた。防潮林の役割を果たしていた松林の中で一本だけ残っていた「奇跡の一本松」も2013年5月に枯死してしまい、今は人工松になってしまったが、その周辺を整備して「高田松原津波復興祈念公園」となっている。今も観光客はこの「奇跡の一本松」を見に訪れて来るらしい。

その「奇跡の一本松」を横目に見、左手に市街地、右手に防潮堤を見て、ため息をつきながら慈恩寺のある和田半島に向かう。慈恩寺では古山敬光住職が境内に立って迎えてくれ、ボランティア活動の拠点だった一室に案内してくれた。その壁面には、全国から来たボランティアの方々の思いやメッセージが綴られていた。記録写真やプログラムや寄せ書きで胎蔵界曼荼羅のように包まれているボランティア部屋の中で、古山住職さんは、寺院が果たすべき役割と可能性とその変化について、穏やかではあるが、鋭い洞察と着眼を以て語ってくれた。

まず第一に、寺院の役割とその未来について。お寺の役割は2つある。1つは、葬式や法要などを含む地域密着型の伝統仏教の役割だ。これについては、「葬式仏教」などと揶揄されることもあるが、やはり、檀信徒の支えとなっているところがあり、このところをしっかりと自覚し、維持していくことが必要で、葬儀の在り方についても、お寺側、仏教者側がきちんとそのやり方や意義や意味を葬儀社にも伝えていかなければならない。そうした、仏教の葬儀や法要に関わる役割の果たし方、これが1つ目の問題点だ。

これに関連して、自坊（慈恩寺）では、特に都会で見られるような「墓じまい」という現象が起こっているわけではない。「墓じまい」をするとか、故人の命日でない日に法要をしたいと言ってくる人に対して、お墓や命日や法要の意義についてしっかり話すように努めている。それをきちんとすれば、ほとんどの檀信徒は理解してくれる。このようなお寺側の説明や姿勢が十分に伝わっていないところがあるのではないか。自坊では、仙台住

職の時代から「出張出張」をしているのですよ。この広田地区から稚内に移住したお医者さんの一家があって、仙台住職はその檀家と縁が切れないように、葬儀や法要があると、「出張法要」するようになったんですよ。私もそれを引き継いで、今も稚内に「出張法要」をするようにしています。全国のお寺さんは、このようなやり方をしていなかったり、そんな檀信徒とのつながりの維持の仕方をよくわかっていなかったりするんじゃないでしょうか？

古山住職は、先代住職の時代から「出張法要」という慈恩寺に伝わっているやり方を説明してくれた。だが、そのやり方は、先代住職さんや古山住職さんと檀信徒との普段からの強いつながりや縁が結ばれているからこそ、切れずに今日まで続いているのだろう。その住職の思い、熱意、誠実さや情熱、仏教者としての生き方。そうしたものがこのつながりを切らさず、「出張法要」という形で継続させたのだと思った。つまり、それが継続されるためには、続いていくだけの必然と理由とやり方があるということだ。そのいずれが欠けても、崩れていくものは崩れていくほかない。その崩落を押しとどめることができない。もし今、檀家の寺離れや「墓じまい」で多くの寺院が困っているとしたら、それを維持し、立て直し、再構築していくだけの努力や方式を編み出し、再構築していかなければならないのだと強く思った。そしてその「やり方」はまだまだある。もっともっと、いろんな方式を見出せる、編み出せる、という希望を持った。今回の訪問で思った「人間の力」「人の底力」というものの具体的な実践事例を感じ取った一瞬だった。

だがそれも、次の子供や孫の世代になったら、どのようになるかわからないという。今の檀信徒の世代は大丈夫だろう。しかし、この土地を離れて遠くの地で育った子供や孫がこの広田の町を本当にふるさとと思えるかと言えば、そうではない。そこは父祖の地ではあっても、自分自身が日々の生活をして暮らしてきた日常のぬくもりや記憶のある町ではない。だから、そこに先祖伝来のお墓があると言っても、外に出た子孫がそのままお墓を維持し、「出張法要」を続けていこうという気持ちになるかどうかはわからない。それが課題だ。古山住職さんはそう語った。

2つ目は、仏教が仏教本来の道を歩むこと。仏教は仏の教えと書く。仏道とは仏の道と書く。つまり、仏教の意味と意義は、仏となるための修行であり、道の実践である。それは「抜苦与楽」の道、つまり、苦しみを抜き取って楽を与えること。それが「涅槃寂靜」の実現であり、悟りであり、解脱である。そんな仏教本来の修行に立ち返り、お寺がそのような仏道修行の道場になること。禅にはその方法と実践法がある。「葬式仏教」を揶揄されてきたコミュニティ仏教、地域仏教、檀家仏教と、もう一つの「修行仏教」「実践仏教」「信徒仏教」を地道に行じ実現していくこと。そのような仏教本来の道を辿ること。それがもう一つの道である。そのような意味のことを古山住職は語った。

古山住職さんのお話をお聞きしながら、東北地方の名刹の地域の中で確かな存在感と絆を形成してきた寺院の力とそれを運営し続けてきた僧侶の底力を感じた。地域仏教と修行仏教、コミュニティ仏教とメディテーション仏教、この二つの道を仏教は歩いていくことができる。それは希望であり、重要な精神遺産であり、道の実践である。

もう一つ、防潮堤の問題や陸前高田市の復興の問題についても語り合ったが、これについては、地域の人たちや行政関係の人たちの間でもさまざまな意見や見解があることがわ

かった。少なくとも考え方は一様ではない。しかし、政治は、その中から一つの政策を選び、実施し、市民生活、国民生活をよりよくしていく過程を辿るべきである。もちろん、そのことを常に議会で議論し、立法化し、予算配分し、政策決定し、実施しているというのだろう。しかし、おかしいと思うことをおかしいと言っていくことも極めて重要なことである。民主主義が多様な意見の表明と合意形成にあるとしたら、まずは多様な意見の内実を明確にすることが先決だ。防潮堤問題についても、出来上がったからと言って、終わったわけではない。むしろ、これからどうするか、どう維持していくのか、どう変容させていくのかを議論する必要があるだろう。

最後に、前の日の朝に何気なしに点けたNHKの地方ニュースに慈恩寺での「漂流ポスト」の供養の報道が出ていたので、そのことを質問した。「漂流ポスト」の供養はどのようにされたのですか？

漂流ポストは、陸前高田に住む赤川勇治さんが2014年に開設した。赤川さんはカフェを営んでいるが、店に来る被災者の心の声を直接聴くことは出来なくても、手紙ならばその人の悲しみや苦しみが吐露されるのではないかと思い、心を閉ざしがちな被災者たちのための「漂流ポスト」を作ったのだった。そして、6年間で800通を越える手紙が届いたという。この「漂流ポスト」の宛先は、〒029-2208 岩手県陸前高田市広田町赤坂角地159-2 漂流ポスト、である。そしてこの「漂流ポスト」に届いた手紙は、毎年、広田町の慈恩寺で供養されるのだが、今年は10月30日だったかに供養され、そのニュースを私が見たというわけだった。苦しみや悲しみを人に話せない人でも、手紙の中では書くことができる。そしてその手紙の中身が公開され、やがて慈恩寺で「手紙供養」される。古山住職さんは、「赤川さんは、本来、お寺がしなければならぬことをやってくださっているのです。」と遠くを見つめながら語った。

慈雲寺を辞する時、いつものように、住職夫人が私たちにいろいろなお菓子と飲み物を渡してくれた。私たちが持って来なければならないのに、ここではいつも私たちが頂く側に回ってしまう。申し訳なくも、ありがたくいただき、広田海岸で海を見つめながら、波の打ち寄せる音を聴きながら、二人でそれをありがたくいただいたのだった。

そこから、高速道路に乗って釜石に向かった。釜石では、山神社と尾崎神社を参拝した。山神社の隣に建っていた仮設住宅はすべて撤去されていた。体育館もなくなっていた。そこで、地元の老人たちがゲートボールをしていた。それは、日本国中どこにでもある、のどかな風景のようではあった。が、なぜか、さびしかった。諸行無常を感じた。移りゆくものかなしみがまじっていた。

その後、大槌町の第14仮設住宅を訪ねた。すでにそこも完全撤去されていた。かつてここに、大槌町の被災者の方々が住んでいて、何度も訪問して交流を重ねた。今はそれぞれの復興住宅に移り住んでいるのだろう。そこから大槌稲荷神社に向かったが、その途中、14-5メートルはあろうかと思われるほどの巨大な防潮堤を目撃することになった。稲荷神社は高台にあって津波被害を免れたが、しかし、今日の前に巨大防潮堤が立ちふさがっていて、海と人の暮らしを分断し、遮っているようにすら見える。大土稲荷神社の十王館宮司さんにお会いして、お話をお聞きしたかったが、留守だった。

昏く沈む気持ちを抱えながら山田町の荒神社に向かったのだが、そこでも、巨大防潮堤

に出くわし、ため息をついた。山田町では山裾にある小さな神社を覆い隠すように防潮堤が立ちはだかっており、未だ工事中であった。

荒神社に着き、一心に法螺貝を奉奏したが、心は晴れなかった。日没の風景は美しく、山田湾を照り輝かせていた。が、そのような美しさと輝きに反するような澱が心の底に沈殿していくのだった。そして、日没の景色を愛でながら、宮古に向かう途中にも長い長い防潮堤の壁が続いているのをヘッドライトに照らしながら見続けていた。

## ★東北被災地訪問第四日目記録動画後篇

(2021年11月4日、1時間48分) : <https://youtu.be/SJnN6kyb4c8>

## 第五日 2021年11月5日(最終日) ~ 目に見えぬ いのちの樹まで 凧上がれ

朝8時半に宿を出て、浄土ヶ浜に向かう。朝の日差しの中で、白く照り輝く海中の岩の小さな島々。浄土ヶ浜とはよくぞ名付けたものだ。名実ともに浄土を感じさせる。たぶん、能で言う「諸国一見の僧」が廻国修行の途次、この浜を見て、「なんと美しい浄土であることよ！」と感嘆の声を上げたのだろう。地元の説明では、江戸時代に、曹洞宗の宮古山常安寺七世の霊鏡龍湖が名付けたと名付けられたとしているが、おそらくもっと古くから「感嘆の声」があったはずだ。その「声」の集積として、やがて「浄土ヶ浜」という地名に定着したのだ。地名が地名として定着するためにはそれだけの理由がある。地名には、地霊と言霊との交歓と合一があるのだ。

ちなみに、宮沢賢治は、大正6年(1917)7月、盛岡高等農林(現在の岩手大学農学部)三年生であった21歳の夏にこの地を訪れている。そして、「うるはしの 海のビロード 昆布らは 寂光のはまに 敷かれひかりぬ」という歌を詠んでいる。まさに、ここは「海のビロード」、すなわち、「生みの美路<sup>ビロード</sup>」なのだ。そのことを、私たちのような回国の徒はみな等しく感じ取ったことだろう。

だが、この美しい浄土ヶ浜も、もう少し北に行くと、「万里の長城」と称された田老町の防潮堤に至る。だが、この「万里の長城」を超える津波がやって来た時、町は壊滅的な打撃を受けた。おそらく、第一波の被害に加えて、第二波の被害も相当なものがあっただろう。むしろ、第一波で破壊された瓦礫が「万里の長城」の壁面沿いに溜まってしまいうので、長城がさらに長く高くなり、嵩上げされた状態になるため、第二波はそれを乗り越えてやってくるので、さらに被害が激甚化したのではないだろうか? そのような二次被害、三次被害のこともシミュレーションしながら防災計画と対策を講じていく必要があると思う。いかなる対策にも「万全」は無い、と断言できる。絶対の安心など、現象界にはない。スピリチュアル(霊性的)な次元で、解脱したブツダや神と合一した神人にはあるとは言えるかもしれないが。

田老町の岸壁に立って、鎮魂の法螺貝を奉奏した。今回は、田老町の防潮堤の全貌を見るために、岬の突端の高台まで登ろうということになって、そこで、この岬の向こう側に「三王岩」があることに10年目にして初めて気づいたのだった。三陸復興国立公園の中に、高さ50メートルの「男岩」の両サイドに、「女岩」と「太鼓岩」が寄り添っている。

そのさまは、本尊と脇侍との関係にも、三位一体の関係にも通じるものがあると思った。約1億年前の白亜紀の堆積層だという。人類史の記憶と記録を遥かにさかのぼる地球生成の記憶と記録がこの巨石の岩石に刻まれているのだ。巨石ハンターよ、この巨岩をうつせよ！

田老町からさらに北上すると、野田村に至る。愛宕神社の大鳥居が見えてきた。震災直後は、鳥居の手前までの家々が津波で壊滅的なまでに破壊された。が、数十人の人が小高いところにある愛宕神社に駆け上って助かった。そして、そのすぐ下の海蔵院が避難所となった。被災当時は本堂に300人ものが身を寄せ合って暮らしていたという。

この事態を敷衍化して言えば、「鎮守の森」である神社が持つ安全機能と、「慈悲のセンター」である寺院が持つ社会福祉機能の統合ないし協力、ということになる。あるいは、外界（自然界）をり浄化する神社（神道）と内界（人間の内面世界）を守り浄化する寺院（仏教）の役割分担と連携関係の構築、というか。もし神道と仏教とが手を携えて日本各地の地域社会をまもることができれば、コンビニや郵便局以上に、今後も日本社会の安定・安心装置としてはたらきつづけることができるだろう。そうありたい、そうしたいものだとは常々考えてきたが、「神仏習合諸宗協働フリーランス神主」の「神道ソングライター」としては、今後もそのような方向と立ち位置で活動していきたい。

野田村について言えば、今は、鳥居前の周辺にもだいぶ住宅が再建されている。また、防潮堤の少し西側を走る国道もだいぶ嵩上げされているようだが、防潮堤ができたとしても決して安全とは言えない。国道から愛宕神社へ折れる車道脇が公園化され、そこで地元の小学生が運動会をしているようであった。その公園の東の海辺は防潮堤で覆われている。田老町のような15メートルにも及ぶ高さではないが、10メートルはあるだろう。

いつものように、愛宕神社と海蔵院を参拝する。両所で法螺貝を奉奏。海蔵院では共に般若心経一巻を朗唱した。海蔵院はこれから本堂を立て直すのか、境内の楓が掘り起こされ、移動させられるようだった。

野田村を出て、久慈市に向かう。久慈湾を一回りして、つりがね洞に行く。ここは2013年上半期に放送されたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」の舞台となった小袖海岸に近い。一時は通行制限になるほどの観光スポットとなっていたが、今はコロナ禍でもあり、観光客もグッと減った。日本国中、ほぼ一律に移動制限がかかっていたから。

前回来たときは、満潮ではなかったのでつりがね洞の中に入れたが、今回は満潮で、洞内に入るのは無理だ。激しくうなりを上げて高波が打ち寄せ、巖に砕け散る。そのダイナミックな光景は見飽きることがない。道路脇の高い岩の上に立って法螺貝奉奏。真逆さまに落ちたら大怪我をすること間違いない。ちょっと怖いな、ここは。しかし、残念ながら、この波では洞内に入ることはできない。ここで我慢するほかない。

ここに来るたびに思う。天然自然が作り上げる造形は、芸術以上に芸術的だ、と。宇宙は芸術家だ。天然自然という芸術家が創り出す造形の見事さ。いつもながら、感嘆する。この造形の妙味・妙手。

猫にも似ている洞窟のシルエットの向こうに観音菩薩像のような岩がある。それを見ていつも手を合わす。ここからだ、と、那智の浜同様、観音浄土に向かう「補陀落渡海」ができそう。つりがね洞の中から観音岩を望むと、心は遠く補陀落に誘われる。観音岩と太平

洋。

太平洋は広く、大きく、深い。海辺の被災者は口をそろえて「海を恨まない」と言う。海は時に大災害をもたらすが、いつも同時に大きな恵みをももたらしてくれたからだ。三陸の漁師さんたちは海を「太平洋銀行」と呼んでいる。「おらっちには、ぜったいつぶれないメインバンクがあるからよう。」

つりがね洞内から観音像をきれいに撮影できるアングルを探り当てて、カメラを向けた途端、大波が押し寄せ、全身ずぶぬれになった。完全なる禊だ。そのまま自然状態で放置していたら、風邪を引くかもしれないので、着替えた。ここで、車でも通り過ぎようものなら、不審者として通報されそう。

着替えが終わって、10年前の最初の被災地訪問でボロボロになっていた私たちを癒し、シャキッと立て直してくれた「My聖地」に向かった。ここには、かつては、廃屋のような小屋の屋根に1本の樹が毅然と生えていた。地面もないのに。屋根だけの生存条件で。だが、この前の3年半前の第13回目の訪問時には、屋根の上の1本の樹も、廃屋そのものもきれいに無くなっていた。こうして、「My聖地」は幻のものとなったのだ。もはやそこを聖地だとするのは私たちの心の内にしかない。心の内なるMy聖地。残念ではあるが、諸行無常の風に晒されるほかない。

しかし、この「我らが奇跡の一本松」の存在によって、この10年間、どれほど励まされ、助けられてきたことか。本当にありがとうございました。ここに来るたびに、私たちは、もう一度やっていけるという勇気と元気をもらったのだった。しかし今は、その小屋も松も跡形もない。消滅した。しかし、その廃屋の屋根の上の一本松は我らが「こころのふるさと」として、聖木として、毅然として立ち、燦然と照り輝いている。

My聖地を後にして最後の訪問県の青森県八戸市に入ってしまった。青森県で一番先に拝するのが海岸線の小島のような岬のようなところにある小祠の塩釜神社である。ここには密猟者を取り締まる監視員小屋があって、時々監視員と鉢合わせする。挙動不審の緑男のホラ吹き私なぞはさぞかし怪しい奴らと監視されてきたことだろう。

だが、私にとっては、ここは、いつ来てももっとも心が締め付けられる場所である。この旅の全行程の中で「最果て感」を強く感じる場所だからだ。26年前に滞在していたアイ  
ランドの西北部の海岸地方を思い出す。その向こうには、大西洋と「常若の国」<sup>ティル・ナ・ノグ</sup>しかない。そこは、この世の果てだ、Land's Endだと思われていた。The Edge of the World。ともかくも、「最果て」フリークの私には、どうしてもなく大変に心魅かれるスポットなのである。私は子供の頃から70歳に至る今でも、「この世の果て」を見たい、といつもいつも思い続けているのだ。

次に弁天島に向かう。ここもまた心に染みるスポットだ。海の中から弁天様を遥拝するような構造になっている。今日は満潮で、法螺貝を奉奏していると、突堤の上まで波が押し寄せて来て、着替えたズボンがまた濡れ、靴は再びズクズクに完濡れした。部分禊。これまた弁天様のお導きであり、功德と有難く受け止めた。海水に濡れるたびに、心の汚れが拭い去られるような思いがした。ちょっと、マゾヒスティックかな？

巖島神社（弁天島）の次は、高岩公園展望台にある高岩神社参拝。ここには巨石群があ

るので、岩の上に立って、太平洋に向かって力いっぱい法螺貝を奉奏する。風が強いと、下から煽られて、ぐらりと体が揺れる。落ちたら死ぬかもしれない絶壁なので、気を付けねば。

その高岩公園からしばし太平洋を望み、次に、鯨石のある西宮神社へ向かう。ここでは靴が濡れていて、車の暖房で乾かしていたので、裸足で参拝し、クジラ石の前で法螺貝を奉奏した。今日はどういうわけか、クジラの背中がくっきりとより鮮明に浮き上がっているように見える。光のせいかな？ それともえべっさんのお恵みか？

続いて、<sup>かぶしま</sup>蕪島神社へ。ここは海鳥の繁殖地で、卵を沢山産んで帰っていく名所だ。海鳥がどこへ帰るのか知らないが、11月には海鳥が渡ってきて（帰ってきて）、産卵してまた戻っていく。言わば、お神輿の「御旅所」のようなところなのである。だから、ここが聖地化される感覚はよくわかる。だが今は、その海鳥はほとんどいない。温暖化のせいかな、まだ渡ってきていないのだ。海鳥よ、早く渡って来て、と呼ぶかのように、海に向かって法螺を立てる。

そこから、三島神社に立ち寄る。祭神は宗像三女神（<sup>いちきしまひめのみこと</sup>市寸島姫命・<sup>たぎりびめのみこと</sup>多岐理毘売命・<sup>たぎつひめのみこと</sup>多岐都比売命）だ。鎮座地は、白銀駅のすぐそばにある。この東北訪問もいよいよ終盤。気を入れて法螺貝奉奏。

そして、いよいよ最後の訪問地である八戸市街地の長者山にある新羅神社へ向かう。神社。なぜここが東北被災地最後の訪問地になったか？ それもまた偶然のような必然のような出会いであった。そこには、須佐之男命と新羅三郎源義光が主祭神として祀られていた。そのことから、導かれるようにここに至ったのだった。というのも、神道ソングライターの「親分」はスサノヲノミコトだから。何と言っても、最後は「親分」に報告感謝せねばならぬ。旅の終わりを。

こうして、無事17時前に八戸駅前にレンタカーを返して、須田さんと一緒に八戸駅から新幹線に乗ったのだった。車中で動画の編集と、翌日に足利市立美術館で行なう「諸星大二郎展」での講演「妖怪民俗学と神智学から見た諸星大二郎の世界」のパワーポイントスライドの整理に没頭していて、普段だとあれこれと総括的に考える余裕も、感慨にふける間もなかった。しかし、この間の「東北巡礼」の旅の重さはずっしりと身心霊に入り込んでいた。

14回目となる今回の旅は、延期に次ぐ延期に見舞われたが、しかし、最終的にこの11月の時期になってよかったのかもしれない。事態は諸行無常であるが、その「むじょう」は、別の観点から言えば「むすひ（むすび）」である。前者は変化の生滅相を、後者は変化の生成・生産相を映し出しているに過ぎない。同じ現象の両極に過ぎないのだ。そう捉えることで、私は「神仏習合諸宗協働フリーランス神主」としての「神学」を構築したのだ。仏教の言う「無常」と神道の言う「むすび」とは別物ではなく、陰陽の如く、あざなえる縄の如く両面・両極・両部・両端であると。それを、「捨てる神あれば、拾う神ある」とも言う。事態は常に破壊と創造を生み出す。終焉は誕生でもある。終わりは始まり。反対の一致は、わが幼少期からの稚ない哲学であったが、それは今でも変わらない。その反対の一致をこれからも生きよう。須田郡司さんとの「東北巡礼」は終わった。それは、リ・スタートでもあった。

## おわりに ～ 生態智 いのちのいぶきの 咲く里へ

地球上では、鉱物・植物・動物たちが相互に関わり合って地球環境を形作っている。それらは、根本的に、「エコロジカル・ディスタンスによって、絶妙なバランスを保ってきた。地球上のあらゆる存在者はこの「エコロジカル・ディスタンス」の均衡の中にあっただ。

しかし、人間はさまざまな道具の発明は行動様式の改変によって、その生態系サービスの均衡を壊し続けてきた。その破壊的・破局的不均衡の一つの現象形態を、今、私たちは新型コロナウイルスのパンデミックという形で受け取っていると思う。

生きるということは、基本的に「距離 (distance) 」を持つ (保つ) ということである。哺乳類の場合、母の胎内から生まれてきて、「原初的一」から分離される。そして、授乳など母子密着の時期を過ぎ、徐々に距離を取ることを覚えていく。それが「社会化」していくということであった。「社会化」とは、個体化・個性化であり自立の過程であるとされる。その過程に「実存的痛み」が生まれる。したがって、「社会的距離」の形成の基盤には、すでに「エコロジカル・ディスタンス」があったのだ。

だから、今、要請されている「ソーシャル・ディスタンス」の前に、根源的に「生態学的距離」があったのである。それゆえ、「社会的距離」は「生態学的距離」の上に成り立つ。人間はこの「社会的距離」によって諸種の「エコロジカル・ディスタンス」を壊してきたが、防潮堤もその現代日本における一例である。20世紀末から顕著になってきた気候変動・地球温暖化やCovid-19 や新型鳥インフルエンザの流行などの事態も、社会的距離と生態学的距離の侵犯とフィードバック、つまりは、生態系サービスの破壊であった。

しかし、いのちのいとなみは、根本的に、この「エコロジカル・ディスタンス」に基づき、人間の場合、その上に、<フィジカル・メンタル・ソーシャル・スピリチュアルなディスタンス>を重ねていくという「ディスタンス」の多層性を作り上げている。

身体的 (フィジカル) なレベルでは、祭りとかの儀礼や性的交感のような密集・密接が起こり、それにより心理的な距離 (メンタル・ディスタンス) も社会的な距離 (ソーシャル・ディスタンス) も変容する。そしてもっともデリケートでありながら、強靱に距離を縮めるはたらきを持つのがスピリチュアル・ディスタンスのレベルである。

スピリチュアルな次元では、時間と空間を多層多重に縮約・縮減・圧縮でき、一体化する可能性を持つ。世界中に展開していった多様な宗教儀礼や宗教思想は、そのような一体化や合一化や「密」の世界を開示している。密教の三密加持も諸宗教の祈りも、距離を縮める手法である。宗教的な身心変容技法は、「スピリチュアル・ディスタンス」を自在に伸縮させる技法を内在させている。そして、その「スピリチュアル・ディスタンス」は、「エコロジカル・ディスタンス」を侵犯しない回路を設定できるはずだ。その回路を再構築していく「楽しい世直し」のワークを行じていきたい。その覚悟を新たにした今回の「東北巡礼」の旅であった。

### ★東北被災地訪問第五日目記録動画後篇

(2021年11月5日、51分) : [https://youtu.be/Lop\\_qz7td\\_c](https://youtu.be/Lop_qz7td_c)